

## 「みんなが発信 つながる心」

### 【中級編】

### みんなが発信 つながる心

※本文は、●の箇所を読んでください。

※薄い文字は、読みません。



おわり



**ゆうき君** 「おはよう、おにいちゃん！」

**あさひ君** 「おはよう、ゆうき君！」

そこへ、そうじをしながら、おじさんも出てきましたよ。

**おじさん** 「おはよう、あさひ君。今日は 鍵持ってるかあ！」

**あさひ君** 「おはよう、持ってるよ！ありがとう！」

散歩中のおばあちゃんも通り掛りましたよ。

**おばあちゃん** 「おはようね。ゆうき君。この間はありがとうね。」

**ゆうき君** 「おはよう。おばあちゃん、僕 またお手伝いするね。」

高校生のお姉さんも学校へ行くところですよ。

**お姉さん** 「おはようございます、おじさん。いつもお掃除ありがとう。」

**おじさん** 「おはよう。しっかり勉強しろよ！」

そこに、ネコもやってきましたよ。

**おばあちゃん** 「おはよう、ネコちゃん。今日もご飯もらったかい？」

**ネコ** 「ゴロニャア～！」

このまちでは、あさひ君の元気な声のおかげで、みんなつながっているね。

みんなも、ご近所でも、学校でも、自分から元気に声を出して、

手を貸し合って、どんどんつながろうよ！

きっと自分の周りから、楽しくて、気持ちの良い場所が広がってゆくよ。



さて。今日も、あさひ君はみんなに大きな声で  
あいさつをしながら学校へ行きます。

今日は、ゆうき君が追いかけてきましたよ。



ゆうき君とあさひ君のおかげで、  
おばあちゃんは、無事に家まで帰ることができました。

「二人とも、ありがとうね。」



そこへ、自転車に乗った あさひ君がちょうど通り掛りました。

「あっ、お兄ちゃん！」

「おっ、ゆうき君。どうかしたか？」

ゆうき君は、涙をこらえながら言いました。

「僕、おばあちゃんの荷物を持ってあげたかったんだけど、  
重くて持てなかったんだよ。お兄ちゃん助けて。」

「そっか、いいよ。じゃあ自転車に乗せな。」



ゆうき君は、大きい方の荷物を持つとうしました。

「ガーン…。」

「重い！」 思った以上に荷物が重たかったので、  
ゆうき君は持ち上げることができませんでした。

「僕にも おばあちゃんのお手伝いができると思ったのに…。」

ゆうき君は泣きたくまりました。



ゆうき君は、そのおばあちゃんが、いつも行く「駄菓子屋さんのおばあちゃん」  
ということに気が付いて、声をかけました。

「おばあちゃん。どうしたの？」

「あれ、ゆうき君かい。荷物が重くてねえ。  
くたびれちゃったんだよ。」

ゆうき君が、はりきって答えました。

「じゃ、ぼくが持ってあげる。」





**【ポイント】**

子どもに問いかけて、答えさせるやり取りの中から、おばあちゃんが、何に困っているかを気づかせ、自分ならどんなことが出来るか考えさせます。



そこには、大きな荷物を持ったおばあちゃんが、  
困った様子で立ち止まっています。

おばあちゃんは「は～あ。どうしようかねえ。」と  
つぶやいています。

ここで、ちょっとみんなで考えてみましょう。

おばあちゃんが大きな荷物を持って立っています。  
そのそばの広い通りを車やトラックがビュンビュン  
走っていますね。おばあちゃんが「どうしようかねえ。」  
とつぶやいています。

**質問 1**

●さて、このおばあちゃんは何に困っているのかな？

(想定される答え)

通りを渡りたい。  
訪ねる家を探している。  
タクシー/バス停を探している。



**質問 2**

●今、いろいろな答えが出てきたけど、みんなは、  
そんなおばあちゃんに対して、何ができるかな？

(想定される答え) →質問 1 の回答から 2～3つ  
選んで、それらに対する解決策を考える。

の答え：横断歩道を教えてあげる。

の答え：訪ねる家と一緒に探してあげる。

の答え：タクシー/バス停を教えてあげる。

困っていることには、いろいろな理由がありそうだね。  
その理由によって、どんな手助けが必要かわ変わって  
くるよね。

困っている理由を知るためには、まずは自分から声を  
掛けてみるのが大事みたいだね。

じゃ、物語に戻って、ゆうき君はどうしたのか、  
見てみましょう。



さて、場面は変わって、あの1年生の泣き虫 ゆうき君。

今日は、何やら楽しそうにスキップをしています。

バイオリン教室の友達のお誕生会にお呼ばれです。

ゆうき君は、スキップをしながら 広い通りまでやってきました。



おじさんが、ドブのフタを ひょいっと持ち上げてくれたおかげで、  
あさひ君は、鍵を拾うことができました。

「おじさん、ありがとう。」



あさひ君は、ドブのふたに手を掛けて、力いっぱい持ち上げようとしてました。

「うーん！ うーん！ うーん！ う～～ご～～けえ～～。

はあ～やっぱり・・・だめかあ。」

あさひ君は、誰かいないかとあたりを見まわしました。

すると、近所のおじさんが、そうじをしているではありませんか。

「おじさーん！ 助けてー！ 鍵がドブに落ちちゃった。」

「おう、あさひ君か。何？ 鍵を落とした？ ちょっと待ってろよ！」



そこにネコが通り掛かりました。

「おい、ネコ、手を貸してくれ！」

ニャアア————ツ！！！！（ネコのいやがる声）

「イテテテ！ ネコに引っ掻かれた！ やっぱりだめかぁ…」

「よし、こうなったら 最後で最強の手段だ！」



次に、公園から木の枝を拾ってきました。

「よし、この棒で取れないかな？ よいしょ。」

「あーん。だめかあ…」



「うわあ！鍵がドブの中に落ちちゃった！ 困ったぞ。取れるかな。」

「そうだ、すき間から手を入れてみよう。」

「うーん。だめかあ…」



それから数日後のことです。

今日も元気なあさひ君は、スキップをしながら学校から帰ってきます。

おや？ どうしたことでしょう！

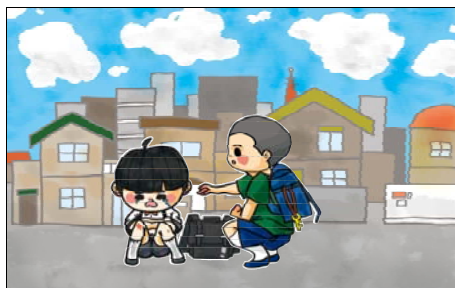
ランドセルに付けていた鍵が、宙を舞って飛んでしまいました。





●あさひ君は、ゆうき君のランドセルも一緒に持って、  
家まで一緒に帰りました。

「お兄ちゃん、ありがとう」



あさひ君は、ゆうき君に声を掛けました。

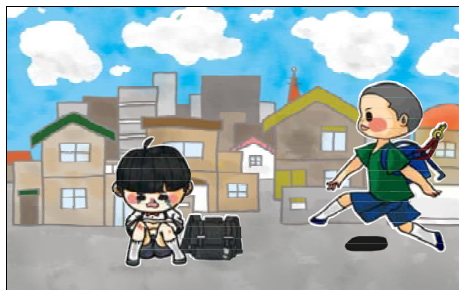
「どうした!？」

ゆうき君は、泣きながら答えました。

「お兄ちゃん。僕ころんじやったの。」

ゆうき君のひざは、すりむけて、血がにじんでいます。

「大丈夫? 自分で歩けるか? 送ってやるよ。一緒にかえろう。」



ある日のことです。

今日もあさひ君は、スキップをしながら、学校から帰ってきました。

公園の前を通りかかると、そこに一人の男の子がしゃがんで、

泣きべそをかいていました。

その子は、近所に住んでいる1年生のゆうき君でした。



「おじさん、おはよう！」

「お姉さん、おはよう！」

「おはよう！ ネコ」

朝のまちに、あさひ君の声が響きます。



あさひ君は、小学校4年生のとっても元気な男の子。

毎朝、近所の人たちに大きな声であいさつをしながら、学校へ行きます。